

ものごとのやりとりを可能にする条件

高田 明 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

赤ちゃんは言葉を話し始めるのと前後して、ものを受けとったり渡したり、周りの人のやっていることを真似たりするようになってきます。活動のバリエーションがぐっと増えるとともに、こちらの思っていることが伝わったと感じることも多くなります。一緒に遊ぶ楽しさは倍増することでしょう。

赤ちゃんが多様な行動をみせることには、周りの人たちの関わり方が大きく関係しているようです。上手に遊ぶためになにかコツがあるのでしょうか？ 私はこういった問題を身振りや会話の「質的」な分析を通じて考えています。以下では、調査にご協力いただいたKDさんご家族の3つの事例に焦点を当てて、ものの受け渡しや周りの人がすることの模倣ができるようになるための条件について考えてみましょう。

ものの受け渡しができるようになるためには、赤ちゃんはまず時間的に隣りあった行為のつながりが理解できなければなりません。この点について、家庭での自然なやりとりのビデオ映像から取り込んだ画像を見ながら考えてみましょう。

事例1: ヨーグルト

Kくんは生後8ヶ月の元気な男の子です。テーブルを前にして、お母さんと隣り合って椅子に座っています。お母さんはKくんの顔を見ながらその口もとにスプーンでヨーグルトを差し出します。そして、Kくんの反応を待つようにスプーンを揺らします。Kくんは少し前に身体を乗り出し、ヨーグルトを食べます。これを見て、お母さんはKくんの髪を優しくなでます。

そこに32月齢のお姉ちゃん、Sちゃんが近づいてきて、テーブルの上のおもちゃを手に取ります。Sちゃんの動きに惹かれて、Kくんはおもちゃを見つめます。するとお母さんはスプーンをとって、Kくんの口の前につんと差し出します。この動きに合わせて、お母さんは「あーん」と発声します。この「口を開ける」動作のオノマトペとともに、お母さんは自分の口も開けています。これらはKくんの注意を呼び戻します。Kくんは少し前に身を乗り出し、またヨーグルトを食べました。その後、お母さんはこの手と口をシンクロさせた行為を何度か繰り返しました。

続いて、Sちゃんがまた近づいてきました。Kくんは前に身を乗り出し、お姉ちゃんをみます。お母さんはすぐさま「あー」といいながら、今度はKくんの口の中に直接スプーンを入れます。Kくんはヨーグルトを食べ、前を見ます。お母さんはKくんの注意の範囲を制限することで、またしてもやりとりの流れを引き戻すことに成功しました。

この例では、お母さんはKくんと隣り合った体勢でやりとりのイニシアティブをとり、ちょっと大げさに言うならば、やりとりにおける「秩序」を維持しようとしています。イ

ニシアティブをとるとは、それに続く行為が予測できるような働きかけをすることを意味しています。お母さんはKくんとやりとりにおいてイニシアティブをとり続けるために、スプーンの動きやそれを出すタイミングなどをうまく利用してKくんの注意をガイドしています。次の例が示すように、これは32月齢のSちゃんには容易ではありません。

事例2：なべ

SちゃんはKくとままごとをしようとしています。Kくんは右にあるおもちゃのなべをみます。これを見て、SちゃんはKくんがなべを触らないように働きかけます。SちゃんはKくんの方へ身を乗り出し、「おと おと おとうとに おと」といいながらKくんの肩を押します。そして身を引いて座位に戻り、「おとさんに抱っこして」といいます。お父さんは「抱っこすんの？」と確認します。そして同時にKくんの背中を支え始めます。しかし、KくんはSちゃんの望み通りには動いてくれません。Kくんは今度はなべを手に取ります。するとSちゃんは大きな声で「だめー！」とやってなべを取り戻します。

これに動ぜず、Kくんはまたしてもおもちゃに手を伸ばします。Sちゃんは、今度はためらいながら甘えたような声で「いやだ、だめ、やだ」と言います。そしてKくんからおもちゃを取り上げ、Kくんを押します。しかし、Kくんはおもちゃの代わりになべを手に取ります。

この例では、Kくんはお父さんの膝の前で身体を支えてもらいながら、お姉ちゃんと向き合って座っています。お姉ちゃんのSちゃんはKくんに言葉で指示を行い、Kくんを相手にままごとを始めようとしてしました。それに応じるように、お父さんは座っているKくんを抱え込むような体勢で支え、Sちゃんに注意を向けさせようとしています。その結果、Kくんはなべやおもちゃを繰り返し手に取ることが可能になりました。しかしこのKくんの行為は、Sちゃんの期待していたものではありませんでした。Sちゃんは2人で楽しくままごとをして遊ぶため、イニシアティブをとってやりとりを開始しました。しかしながら、おもちゃに手を伸ばし続けるKくんは、まだSちゃんのそんな考えに思いを巡らすことは難しかったようです。そしてSちゃんも、先ほどの例のお母さんのようにうまくKちゃんの注意をガイドしていくことはできませんでした。

事例3：うえうえ

最後の例は、先の2つの事例から3ヵ月ほど経った頃のビデオ映像から得られたものです。11ヶ月児になったKくんは、お姉さんのSちゃんと並んで床に座っています。視線の先には、お母さんがキッチンで炊事をしながら立っています。このビデオが始まる少し前から、Kくんは両手をあげ、繰り返し上下に振っていました。その際、興奮して何度か「あー」という声をあげました。この両手をあげる動作は、はじめは抱っこを求めるようにお母さんに向けて行われたようです。しかしここでは、この動作は他の家族からの楽しい雰囲気での模倣を呼び起こします。

お姉さんのSちゃんは「ぼうおうおうおう」と発声しながら、両手を振ってKくんのリズムカルな動作を模倣し始めます。するとKくんは笑いながらSちゃんをみます。

3行目のSちゃんの発話の「って」という部分は、その前の「ぼうおうおうおう」という発話がKくんの発声を再現していることを示します。これに対して、Kくんは「えー、え、え」といいながら身体を揺らし始めます。Kくんの両手は、Sちゃんと同じように顔の前の位置に掲げられています。これは、KくんがSちゃんの動作を真似ていることを示しています。その後、お母さんは「パチパチー」といいながら拍手します。Sちゃんもすぐに拍手し始めます。

その直後、Kくんも両手を顔の上に掲げて同じように拍手を始めます。Kくんは拍手を繰り返す中で、再びお母さんやSちゃんの行為を参考にしながら、Sちゃんを真似てその手の叩き方を少し変化させたのです。

この場面では、KくんはSちゃんと並んだ体勢から、視覚的（拍手をする光景）、聴覚的（手を打ち鳴らす音やオノマトペ）に示された行為を模倣して、発声と身体動作のリズムカルな繰り返しとその変奏を見せてくれました。その場にいるやりとりの参加者はみなで斉唱するかのように一緒に発声や動作を行って楽しんでいます。こうした場面ではやりとりの参加者は同じ方向に注意を向け、それぞれのちょっとした声や動作の変化にも敏感になっているようです。同じ目的に向かいながら一緒に振る舞うこと、さらには相手の行為に対して適切に応答すること、これらはものごとのやりとりができるための基礎となっていると考えられます。

以上、ものの受け渡しや周りの人がすることの模倣を可能にする条件を見てきました。この条件は以下の4つぐらいにまとめられるでしょう。やりとりを始める側が、(1)イニシアティブをとる、すなわち相手の特定の応答が期待されるように振る舞うこと、(2)相手が期待された応答を行わない場合は、相手の注意をガイドしてやりとりを修正すること。また開始されたやりとりの受け手は、(3)やりとりされる「もの」が自分にとってだけでなく、相手も注意を向けうるものとして扱えること、(4)相手と目的を共有して一緒に振る舞うこと、さらにはイニシアティブをとった行為へ適切に応答すること。

これらのやりとりには、言葉をまだ流暢に発することができない赤ちゃんも参加することができます。赤ちゃんをよく知る家族は、その子が言葉を発して伝えなくても(1)~(4)を一緒に行ってくれる最適の相手でしょう。そして、赤ちゃんはそうしたやりとりを積み重ねることを通じて話す力を少しずつ発達させていくように思えます。

赤ちゃんやその周りの人々がものごとのやりとりを行う際には、相互に自分の思いを伝えよう、相手の思いを理解しようとしています。しかし、それは常にうまくいくとは限りません。それでも数々の失敗を糧にして、バリエーションを増やしながらいりとりは進んでいきます。そう考えると、日常的に起こっている些細なやりとりは、エピソードを積み重ねることで展開していく壮大なドラマ的一幕のように見えてきます。